



9. 『本朝文鑑(ほんちょう ぶんかん) 九巻／各務支考 編』

俳文集。支考編。享保二年(1717)成、同三年刊。野田治兵衛ら板。本書は支考が範とすべき文章の格式を立て、それに適った古今の歌文を広く集めたもので、その広範な文章感から採択された作品は多種多様で、芭蕉の立てた俳文の格とは異なった性格のものが多数混入している。本書は門人蓮二房と渡部狂が、支考の遺命を受けて編集したことになるが、これらはいずれも仮設の人物で、支考本人は生存し、変名で自在に活躍したのである。展示資料は全九巻が上巻(一卷～三巻)と下巻(四巻～九巻)の合本に再編されており、見返しに「文政八年」(1825)の文字がある。

10. 『饒舌録(じょうぜつろく) 二巻／元木阿弥 著』

俳諧論書。元木阿弥(もとのむくあみ)著。文化元年(1804)序。同十三年刊。江戸萬笈堂英大助ら板。俳諧の切字、てにをはについて説いた書で、一々発句と和歌を引用して、極めて詳密な説明を加え、初学者の便を図ったもの。広く行われて度々版を重ねた。展示資料は江戸・萬笈堂英平吉(ばんきゅうどうはなぶさへいきち)版。

11. 『風俗文選(ふうぞく もんぜん) 十巻／森川許六 選』

俳文集。許六(きよりく)選。宝永二年(1705)成、同三年刊。井筒屋庄兵衛(いづつ やしょうべえ)板。本書は「本朝文選(ほんちょうもんぜん)」として刊行の後、支考の勧告と路通(ろつう)の抗議とによって、「風俗文選」と改題され、序文や目録等すべて本朝の文字を風俗に改めて再販した。本書は蕉風俳人の文章を編集したもので、多数の作者の俳文を集めた書としては最初のものである。芭蕉はその生存中に俳諧文章をあつめて一集を編むことを思い立っていたが、心にかなうものがなかったの、ついに果たすことができなかった。その後十五年を経過して、許六が師の意思をついで、当時の作家の俳文を修正してその事を果たしたのである。展示資料は野田弥兵衛尉板の九冊本(七、八巻合本)。一卷の扉に「本朝文選」の旧題が残る。

<引用文献>

- ・ 『コンサイス日本人名事典 / 三省堂編修所編』改訂新版 三省堂 1993年
- ・ 『平凡社大百科事典』平凡社 1984-1991年
- ・ 『俳諧大辞典 / 伊地知鐵男 [ほか]』明治書院 1957年

◆城西大学は、鶴ヶ島市立図書館と相互利用提携を結び、市民のみなさまに図書館を開放しています。どうぞご利用ください。

城西大学水田記念図書館 <http://libopac.josai.ac.jp>
〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1
Tel. 049-271-7736 FAX 049-286-8126

芭蕉と江戸俳諧の世界



第30回鶴ヶ島市立図書館まつり
2017年9月23日(土)/24日(日)
会場 鶴ヶ島市立中央図書館

本学は、創立者・初代理事長水田三喜男先生が提唱した「学問による人間形成」を建学の精神として、昭和40年に創設されました。経済学部、理学部の2学部構成で開学し、現在は加えて、現代政策学部、経営学部、薬学部、大学院（経済学研究科、経営学研究科、理学研究科、薬学研究科）、別科、および城西短期大学を擁する総合大学です。

図書館は、当初図書室からスタートし、1978年に水田記念図書館棟が竣工しました。地上9階建、閲覧席808席、積層書庫5層を有する、学内のシンボリックな存在として親しまれています。

図書館では、建学の精神に基づく学士力・人間力の涵養に資することを目的として、古典文学の資料も蒐集しています。今回はそれらの資料の中から、芭蕉が活躍した江戸時代の俳諧に関するものをご覧ください。

芭蕉(ばしょう)[1644—1694]正保1—元禄7

江戸前・中期の俳人。松尾与左衛門の次男として、伊賀国上野(現、三重県伊賀市)赤坂町の農人町に生まれた。姓名は松尾宗房、俳号ははじめ宗房を用い、江戸に下って桃青(とうせい)と号した。別号も多いが、好んではせを、芭蕉とも署名した。伊賀服部郷松尾の土豪を祖とする武士の家に生まれ、新藤新七郎良忠に出仕。北村季吟(きぎん)について貞門の俳諧を学んだのち、俳諧師として独立した。1689(元禄2)年に弟子の河合曾良(そら)を伴って江戸をたち、東北・北陸から大垣にいたる5か月の「おくのほそ道」の旅をした。1694(元禄7)年10月12日に大坂で病み、病中吟く旅に病んで夢は枯野をかけ廻るを最後に門人に看取られながら世を去った。遺言によって近江の粟津義仲寺(あわづ ぎちゆうじ)に葬られた。

俳諧史上最大の人物で、前代の貞門・談林の句風を止揚し、中世的な美意識であるくさびを俳諧の軽みのなかに完成させた。

<展示資料>

1. 『奥の細道(おくのほそみち)』／松尾芭蕉 著』

松尾芭蕉著。書写者不詳の写本。巻末に「芳風」の号があるが墨塗りされている。

2. 『滑稽發句類題集(こっけい ほっく るいだいしゅう) 三巻』／金太樓 編』

川柳選集。初編は金太樓(きんたろう)編。江戸中～後期の川柳句集『柳多留』(やなぎだる)から佳句を抜萃し、四季・恋・人物・生類・天地・遊芸・雑に分類、随所に滑稽な自画を挿む。句も滑稽なものを主とするが佳句に富む。展示資料は写本である。(書写者不詳)。

3. 『七部集大鑑(しちぶしゅう おおかがみ) 八巻』／何丸 著』

俳諧注釈書。月院社何丸(なにまる)著。文政六年(1823)板行(はんこう)。書林、京都浦井徳右衛門他四軒。芭蕉七部集から発句・連句・序跋(じよばつ)などの難解なものを抜抄し詳解をほどこしたもので、引用書目五百余、十九年の春秋を経て成ったものという。七部集全体に亘る注釈の最初のものである。

4. 『新編俳諧文集(しんぺん はいかい ぶんしゅう)』／蟹守 編』

俳文集。蟹守(かにもり)編。初版は文政八年(1825)刊。小林新兵衛板。蟹守が東西遊行の折、諸家に請うて文章を得、これに「風俗文選」以来の個人の分を増補したもの。安永・天明から文化・文政頃までの俳文の特色を知るための好資料。展示資料は上下巻を合本した写本(書写者不詳)。

5. 『芭蕉翁句解参考(ばしょうおう くかい さんこう) 四巻』／何丸 著』

俳諧注釈書。何丸著。文政十年(1827)刊記。京都、浦井徳右衛門他二都六軒の合板で刷られている。芭蕉の発句を類題別に掲げ、各句に注釈を施したものである。百七十余点に及ぶ俳書を引用して、発句千二百四十余句を挙げている。

6. 『芭蕉文集(ばしょう ぶんしゅう)』／松尾芭蕉 著、小林風徳 編』

俳諧文集。松尾芭蕉著。珠淵小林風徳(しゅえんこばやしふうとく)編。芭蕉の文集として出版された最初のもの。本文二巻と文集竟宴(ぶんしゅうきょうえん)付録一巻から成る。展示資料は大阪・藤屋弥兵衛板の地巻(下巻)。

7. 『俳家奇人談(はいか きじんたん) 三巻』／竹窓玄玄一 著』

竹窓玄玄一(ちくそうげんげんいち)著。文化十三年(1816)刊。江戸鶴屋ら板。宗祇(そうぎ)から涼袋(りょうたい)及び遊女俳人に至る安永以降の八十余家の小伝である。引用句は『俳諧古選』に拠るものが多い。

8. 『俳諧古今抄(はいかい ここんしょう) 三巻』／各務支考 編』

俳諧作法書。支考(しこう)編。享保十五年(1730)野田治兵衛(のだちへい)板。「再選貞享式」(さいせんじょうきょうしき)三冊、「拾遺十箇条」(しゅういじっかじょう)一冊、「新製東花式」(しんせいとうかしき)一冊に分け、それぞれ蓮二坊(支考)が注釈あるいは校合をして刊行する形をとり、蓮二坊の惣序と渡部狂(支考)の跋をつけて一部の書としている。展示資料は上中巻に「再選貞享式」の二冊、下巻に「拾遺十箇条」一冊を収録。「再選貞享式」第三冊と「新製東花式」が欠の状態で見られる。